コラム
~Viva La Vida~
酸いも甘いも

ミルハスでピアノを聴いて

小　泉　ひろみ
（秋田県医師会 会長）

「あきた芸術劇場ミルハス」がオープンして、秋田のホテル業、飲食業等が徐々に活性化してきたと聞く。一市民の私も、大変嬉しいこの頃である。最初は、「とにかくミルハスに入ってみたい」という思いであった。初めて入ったのは裏千家のお茶の研究会であった。その後、何回かいろいろなコンサートにも行くことができた。いくつかの東京のコンサート会場では、公演の合間にシャンパンを飲むような場所があったので、ミルハスがそのような造りになっていないのは少々残念ではあるが、様々なアーティストが来てくださり、色々な公演が行われ、特にコロナ禍で芸術的な点で飢えに飢えて干からびていた私たちにとっては、大変嬉しい場になっている。

先日、友人が「買っていたのに、また買っちゃって」とチケットを譲ってくれたので、１月29日に行われた「Ｓｔａｎｄ Ｕｐ！ Ｃｌａｓｓｉｃ Ｉｎ Ａｋｉｔａ」に行った。ひと言でいえば、とにかく素晴らしいコンサートであった。出演は、４人のピアニストと、１人のサクスフォン奏者、１組のトリオ。いずれも国内外の一流の方たちで、大変に贅沢な時間であった。特に、2022年11月、フランスで行われたロン・ティボー国際音楽コンクールで１位を受賞したばかりの亀井聖矢さんのピアノ演奏は、圧巻であった。椅子に座るまでは穏やかな表情であったが、鍵盤に手を置き弾き始めると、正に超絶技巧というのがふさわしかった。どんな小さな音色でも１音１音ずつが際立っていた。指が長いためか、鍵盤の上で踊るように跳ねるような指遣いは、人間の域を越えているようだった。前回のこのコラムで書いたマウリツィオ・ポリーニ氏の演奏を聴いた時、その指の動きを見た時に近い驚きと感動であった。さっそく会場でＣＤを購入した。ＣＤで聴くと音がやや固い感じがして、ピアノが鍵盤楽器であること、弦があることを意識することになった。このことを今もピアノをやっている友人に話すと、「会場の響きが印象を変える」とのことで、深く納得した。「そうか、会場そのもので音が響くし、もしかして、観客という存在も音の響きに影響するのかもしれない」と思った。そのようにコンサートホールは設計されているのか。コロナ禍で観客のいないホールでの演奏はいかがだったのだろうかと想像したりもした。

せっかくなので、今回のコンサートに出演してくださった他のピアニストについても書く。コンサートの最初に演奏した紀平凱成（きひらかいる）さんは、お母さまが著書に記されているので、ここに書いていいと思うが、自閉スペクトラム症の方で、自分で作曲した曲を演奏した。とても才能がある方だと思った。また、指遣いが亀井聖矢さんと似ていたので、たぶん指が長いのだと思う。発達障害の方たちの中に、天才的な才能を持つ方たちがいる。サヴァン症候群と呼ばれ、自閉症や知的障害の方の中に認めることがある。音楽、計算、数学、空間認知能力、美術のいずれかの分野に才能があると言われ、岩波明氏の著書「天才と発達障害」では、

アインシュタインや山下清などの天才がサヴァン症候群であったと思われると記されている。映画「レインマン」の主人公は優れた記憶力を持つ天才であり、一度見たもの聞いたものをすべて記憶してしまう。ダスティン・ホフマンが実在の方を大変正確に映して演じていたことでも高い評価を受けた。音楽に突出した才能がある場合に「音楽サヴァン」と呼ばれることがあり、同じ著書では、フランスの作曲家のエリック・サティ(1866-1925)がサヴァン症候群と書いている。紀平凱成さんも、コンサートのパンフレットには「幼児期より、風の音や鳥の声などを音符で表現し」と書いてあった。

慶応義塾大学の本多栞氏の論文「精神疾患と音楽機能の関連性」(KEIO SFC JOURNAL Vol.20 No.2 2020)によると、ある患者が「絶対音感を持ち、複雑な和音をすぐ再現し、数分の長さであれば、聞いたことのないメロディーでも演奏し、それを難なく移調することができる」と記している。私は、自閉スペクトラム症の方たちには素敵な世界があると思っている。自閉症の初期の専門家の一人であったローナ・ウィング氏は、自らも自閉症児の母であったが、その著書に「自閉症の場合、私たちの方から、彼らの世界に近づいていく努力をした後でなければ、私たちは彼らを私たちの世界の中に導いてくることができない」と記している。私は、日常診療の中で、この言葉をとても大事にしている。彼らのそれぞれの世界を壊さずに、こちらの世界に招待したいといつも思う。サヴァン症候群の方たちは、凡人には到底達することのできない才能を持っているが、いわゆる普通と言われる集団の中で日常生活を送っていくには、様々な困難がある。特に自閉スペクトラム症の方はコミュニケーションの質や社会性に困難があり、様々のこだわりもあることから、日常生活を送るには生きづらさがある。

また、特に彼らは、聴覚過敏、視覚過敏、皮膚感覚過敏など様々な感覚過敏を持っており、それが生きづらさになっている方も多い。紀平氏のお母さまの本では、彼が聴覚過敏に苦しんでいたという話が綴られ、好きなピアノと聴覚過敏の中で行きつ戻りつしながらも、ピアノを弾きたい、ピアノの音を好きな方々に届けたいという気持ちが勝っていったという経過がわかり、かなり壮絶だったのではないかと想像できた。彼が感覚過敏であってもピアノに向かうことができたのは、周囲の支援する方や応援する方の温かさがあったからではないだろうか。確かに感覚過敏は、気持ちが安定してくると程度が軽くなる方もいらっしゃる。感覚過敏への対応で重要なのは、周囲が理解して対応を考えることだと考えてきたが、それ以上に温かい雰囲気で見守ることが一番重要なのかもしれない。

続いて、石井琢磨さん。人柄がいい方だなあという印象で、先日大館であった石井さんのソロピアノコンサートにも行ってみた。音楽を愛していて、私たちにも愛してほしいという気持ちが伝わってきた。

高木竜馬さんは、私の好きだったアニメ「ピアノの森」で演奏していた方の一人で、連弾の時、紀平さんをサポートしているように見え、他の演奏者との共演を大事にしている方だと思った。サクスフォンの上野耕平さんは、なかなかチケットをとるのが難しいくらい人気の方で、トリオの「TUKEMEN」は、以前も秋田でのコンサートに行ったことがあるが、それぞれソロでやっても良いような才能の方たちであると思う。

後日、チケットをくれた友人、合唱団でピアノをやっている友人、当日の朝急にチケットを購入した友人と食事をした。私たちの結論は、「やっぱり生、やっぱり対面がいいね」ということになった。